

紺碧。

佐倉吹雪

◆登場人物

男

女

もうひとりの男

老婆

医者

課長代理

チカ

アキ

ルミ

ユキ

テル

トシ

クニ

暗い舞台にハタハタと音がする。

何の音だろうか。

そのうち雲が途切れたのか、薄く月光が差し込む。

一面に、白い花がハタハタと風に吹かれている。(花は白い紙を折ったもの)
美しい夜。

花に誘われるように黒いシルエツトの人々が舞台に現れる。

花の美しさに心を奪われたのか。

立ち尽くす人々のシルエツト。

うっすらと半鐘の音が短く断続的に聞こえてくる。

聞いているうちにそれは蝉の声に変貌してゆく。

やがてそれはすべてを飲み込むほどに盛大になっていく。

シルエツトたちが、ひとり、またひとりと固まっていく。

まるで、命を持たない彫像のように。

月明かりと思えたそれが、昼間のものに変化する。

物語が始まる。

蝉の声がしきりにする。

その声はセンサー、センサー、センサーと叫んでいるように聞こえる。

センサー、センサー、センサー、センサー……。

実際、その声は彫像たちの口から漏れていた。

彫像たちが動き出す。

蝉の声の中から飛び出してきた男、蝉よりもさらに切羽詰まった声で叫ぶ。

男
せんせいっ！

「先生」と呼ばれた男が、くるりと振り向いて。

医者 ほとんど眠れない、んですね。

男 はい。

医者 食欲もない、と。

男 はい。

医者 何を食べても味がしない、わけですね。

男 はい。

医者、ぱたりとペンを置いて。

医者 少し休んだらどうですか？

男 ……え。

医者 ストレスを甘く見てはいけませんよ。診断書、書いておきますから。

男 診断書ではなく、薬をもらえませんか。

医者 休養が一番の薬ですよ。

男 しかし…。

医者 お大事に。

医者、男に診断書(最初白い花として舞台上に存在していたもののひとつ)を渡して消える。

男、渡された診断書を見つめて。

男 こんなもん、持っていったらどうなる？ わざわざ不資格者の烙印押されに行くようなもんじゃないか。

男、蝉を聴く。

そして蝉の声を呟く。

男 せんせー、せんせー、せんせー、せんせー……不適格者……なのかな……夏休みの間に、なんとか……しないとなあ。

一心不乱に叫ぶ蟬の声の中に人の声が混じっていく。

「せんせー、せんせー、せんせー、せんせー……」

彫像としてそこにいた人々は、徐々に回想の声の主たちとなる。

みなそれぞれ白い花をひとつ手にして、ある者はこねくり回しながら、またある者は無造作につまみあげたまま等、すなわちそれぞれの向き合い方で花をもてあそんでいる。

しかし口だけは別次元のように激しくまくしたてている。

全員 先生！

全員 どういうつもりですか！

声ーうちの子はケガをしてるんですよ。

男 ですが最初に手を出したのは息子さんですし……。

声ーそれなりの理由があったんです。理由がある上につきとばされてケガをしてるんですよ、うちの子は。

男 理由って……。

声ー消しゴムをね、貸してくれなかったんですよ。

声2 どうしてうちが謝らなければならいんです！

男 いや、でも相手はケガをしているわけですし。

声2 たいしたケガじゃないんでしょう。そもそも先に手を出したのはあちらさんですよ。うちに謝ってのはおかしな話でしょう。

男 しかしですわね……。

声2 なんですわ？ 先生はうちの子を悪者扱いするんですか？ お気に入りの消しゴムを取られそうになった上に殴られて、ちょっと払ったら、勝手によろけて机の角に頭をぶつけたっていうじゃありませんか。どこが悪いんです、うちの子の！

男 いや、あの……。

声3 うちの子は食べられないものが多いんで、給食を無理に食べさせないでいただけます？

男 しかしですわね、お子さんの発育を考えて……。

声3 大きなお世話です。

男 その大きなお世話をするのが教師の仕事でして…。

声3 しつこいわねえ。言いたいのはそれだけ？

男 いえ…給食費、払ってください。

声4 川本くん、今日も来てませんね。ホームルーム、代わりに見ますから迎えに行ってください。まさか、いじめなんてことは…。

声5 困るんですよ。いじめなんて。教育委員会に知られたら我々の点数が下がるんですよ。あなたは、臨時教員ですから、そんなことどうでもいいかもしれませんけどねえ。

男 いえ、決してそんなことは。

声6 クラスの平均点ちよつと低いですねえ…。教育委員会がうるさいんですよ。ほかの県と比べられちゃうから。もう少しなんとかありませんか。

男 なんとかかっていっても…居残り学習とか、手は打ってるんですが…。

声6 どうですか？ 保護者にそれとなく塾を勧めてみては？

男 は？ 塾？

声4 駅裏の学習塾、なかなかいらしいですよ。スパルタで。

声5 私ら、スパルタなんてできませんからねえ。すぐ問題になっちゃう。

声消しゴム…。

声7 先生、部活の指導も頼みますよ。県大会近いんですから、バレー部。

男 でも…放課後は採用試験の勉強を…。

声5 臨時だからってね、ただ授業やってればいいってわけにはいかないんですよ。

声消しゴム…。

声7 生徒をなぐるな？ 何言ってるんですか。

男 でも体罰は…。

声7 体罰？ 人聞き悪いなあ。こいつらはバカだから部活でがんばるしかないんですよ。

声消しゴム…。

声7 勝たなきゃ意味がないんです。

声消しゴム…。

声7 それがいづらのためなんです。

声4 先生のクラス、ちょっと落ち着きないんじゃないですか。

声消しゴム……。

声6 しっかり生徒を監視してくださいよ。

声5 子供なんてものはね、監視しとかないと何をしてくすかわかりませんよ？

声6 監視して、管理するんです。

声消しゴム……。

男 授業中だぞ、席につきなさい。

声消しゴム……。

男 なぜ宿題をやってこない。

声消しゴム……。

男 どうして言うことをきかないんだー！！

声全員 消しゴムー！！！！

男、思わず手を振り上げたところで、ハッとして手を止める。

そんな男をじっと見つめる無数の目。

男 なんで……そんな目を……。

怯える男。

男 その子は振り上げた僕の手を蔑むような目で見ていた。ずっと僕の目を見ないまま、僕のすべてを蔑んでいた。

彫像たち、せんせー、せんせーと呟くように蝉を鳴く。

その声は次第に大きくなってやがて会場じゅうに蝉が響く。

まるで輪唱のように響く声たち。

男は深く大きなため息をつく。

男 不資格者、なのかな。でもなあ、ほかに、今更…。

蝉の声しきり。

男 オレ、なんも持ってない…。

握っていた拳を開く、そこにはもう何も無い。

立ち尽くす男。

後方から荷物を手にいっぱい抱えた女が走ってきて、男にぶつかる。

女 あ、ごめんなさい！

男 ……。

女 あの、大丈夫ですか？

男 あ、ああ、びっくりして。

女 ほんと、すみません！

男 あ、いえ、こっちこそ、ぼーつとして。大丈夫、大丈夫。

男はまるで自分自身に言い聞かせるかのように「大丈夫」を呟く。

女はそんな男を怪訝そうに見て。

女 そうですか？ じゃ、ごめんなさい、急いでるんで。

女、そのまま、駆け去る。その腕の中から一枚の紙が落ちる。

男、拾って。

男 あ、あの、落としましたよ。

女、振り返って、その紙を認めると笑顔になって。

女 差し上げます。それじゃ！

男 え？

女、そのまま走り去ってしまう。

男 差し上げるって…。

男、拾った改めて眺める。それは、何かのチラシ。

男 「ほっとする島、穂戸之島？」へえ…こんな島、あったんだ。船で40分…か。

波の音。

男 ほっとしたい…。

汽笛の音。

場面変わって、先ほどの女が姿を現し、熱弁をふるう。

女 現代社会に生きる現代人はみんな疲れ切っているんです！ あ、いや、そりゃここでは、みんなマイペースで、のんきにやっていますけど…都会では違うんです！…え？…ちよつと、後藤さんそんなちゃちゃ入れしないでください。田舎生まれ、田舎育ちの人間が都会を語っちゃいけないんですか？ そんな法律あるんですか？…いや、わかってますよ、首藤さん、熱くなってもせんって。冷静です！…ちよ、衛藤さ

んまで、そんなこと言わないでください。私は真面目にやってるんです！ ああ、もう！と・に・か・く！ 私の目に狂いはないんです。資料を見てください。さっき、配りました。あるじゃないですか、そこ。見てください！ 私が作った観光PRチラシです。きつと当たります！「ほつとする島」。この島の、この常軌を逸した、ド外れたのんきさは、もはや資源です！ そう！ りっぱな観光資源！！

課長代理、現れる。

課長代理 朝からずいぶんと熱弁をふるってるじゃないか。

女 あ、課長代理。おはようございます。今の話聞いていただけました？

課長代理 ほつとする島？

女 はいっ。それです。私、観光課に配属されて、この島の担当になって、本当にやりがいを感じているんです。これまで、なんていうか、小学校から短大まで、なんとなく流して、割とすんなり、何事もなく生きてきたその分、一気にどーんと来た衝撃っていうか……やる気の波的な。

課長代理 キミ。

女 はいッ。

課長代理 お茶は？

女 え。

課長代理 ー〇時過ぎてるじゃないか。早くお茶を淹れなさい。

女 はっ。

課長代理 それが、キミの仕事だろ。

女 や、私は……。

課長代理 早くしなさい。

女 でも……。

課長代理 加藤君、例の資料できてるかな？

女 ……。

女、仕方なく背を向ける。

女：…ぜったい、負けない。(小さく)

女、大きく息を吸い、くるりと振り向くと…。

女 お茶っ葉、切れてるんで、買ってきまーす。

女、走り去る。

場面変わって、舞台は明るい陽射しの降り注ぐ美しき島。
波の音。

女、紙飛行機を折っている。

連絡船が港に着いたようだ。

男、船を降りる。

女、飛行機を飛ばす。

女 いしあたまッ、バカ、加齢臭！

思いつく限りの悪口を言いながら飛行機を折る。

あたりに広がる紙飛行機の群れ。

冒頭のシーンで花だと見えたそれは、紙飛行機の羽が風にはためいていたのかもしれない。

そしてその飛行機のひとつが、島に着いたばかりの男のもとに。

男 あ。

女 あっ、すみません。

男、自分の持っているチラシと、紙飛行機は同じものだと気づいて。

男 これ……。

女 あ、さっきの。え、来たんですか？

男 はい。

女 もしかして、そのチラシを見て？ って、そんなわけないか。あつ、はい、そんなわけないですよ。あー、いや、そうだったらいいなー、って、すみません、願望っていうか、それ、私が作ったんで。

男 あ……そうなんですか。あ、はい、そうです。

女 え？

男 だから、あの、これを見て。

女 見て？

男 来ました。

女 えっ、そうなんですか！？

男 ええ、まあ。

女 うっわ……。

女、無言で、全力の喜び。

男 あ、あの、大丈夫ですか？

女 喜んでます。

男 あ、そうなんですか。

女 はい！ 日頃感情を押し殺す癖がついてるもんで。わかりにくくてすみませんッ！

男 あ、いえ……って、押し殺せてなかった気がするけど。

女 あの！

男 はい。

女 お願いがあります。

男 は？

女 一緒に来てください！

男 え？どこに？

女 案内させてください。島を。

男 え？いや、悪いし…。

女 気にしないでください。仕事みたいなもんだから。

男 みたいなもん？？

女 私、市の観光課で働いてて、今度この島の担当になったんです。

男 ああ。

女 だから案内します。いえ、させてください。

男 でも…。

女 その代り。

男 え？

女 あとで観光課と一緒に来てくれませんか？

男 ええ？なんで僕が…。

女 このチラシの効果があつたってこと、証明したいんです。ひどいんですもん、みんな。ろくに見てもくれないの。そのくせ自分たちはなんの努力もしようとしない。島は寂れる一方。なんのための観光課なんだって話ですよ。

男 はあ…。

女 もちろん、もちろん気に入ったらでいいんです。

男 …。

女 島が、ですよ、私じゃなくて。やだ、なんか。違いますよ？

男 もちろんです…。

女 よかった。あんまり豆鉄砲な顔なさってるから。

間。

男 ……ああ…ハトが？

女 ええ、ハトが。

男　なんか、話の展開についていけなくて、すみません。

女　そんなに展開しましたっけ？

男　や、なんだろう…早くて？…頭回ってないのかな。

男の台詞を聞いて、女、俄然、自分にダメだしを始める。

女　ああーあ、だめだめ。憩いの島なんだから。こーう、もっとーゆっくりー話さないとー、ねえ！？　私は島のホストなんだから。あ？　いや、女だから、ホステスか？

男　…。

女、男の視線に気づいて。

女　そういう意味じゃありません！

男　はい。

女　そういう期待をもたれたら、困るんですけど。

男　持ってません。

女　よかった。だったら、ついてきてください。ほっとする島。ご案内します！

男　あ…いえ…。

女　ほっとしたいと思いませんか？

男　…思います。

女　だったら！

男　でも…。

女、男におかまいなしに歩き始める。

女　何してるんですか。こっちこっち。

男 あ、ああ、はい。

男、女に気圧されてうっかりついていく。

女 あ、お腹すいてませんか？ お昼、まだですよね？ まだ十一時過ぎたところですもんね。ちようどよかった、おいしいマグロ丼食べさせるところがあるんです。ふつーのおばちゃんがやってる店なんですけどね。あ、知ってました？ この島、明治の昔からマグロ漁が盛んですよ。それで島では獲ってから一度も冷凍してない真正銘の生のマグロが食べられるんです。心臓とか、胃袋とか、あごの肉なんかも美味しいんですよ、新鮮だから。まるごと全部食べられちゃうんです。

女、男を先導しながら捌ける。

男、女の鉄砲トークに引きずられながら捌ける。

やがて、また出てくる二人。

今度は男が先を歩いている。

女 すみません。なんか、私の分まで払わせちゃって。そういうアレじゃなかったんですよ、ほんとに。さっき、印刷所で、これの代金払って。思っ

たより高かったんですよ。すっからかんになってたの、すっかり忘れちゃってて。

男 いいですよ。そんなに高くなかったし。

女 でしょー。あんなの東京で食べたら、すごいお金取られますよ。行ったことないんで、たぶんなんですけど、たぶん間違いないです。

男 たしかに……旨かった……気がする。

女 え？

男 あ、いや。

女 やー、でもほんっと焦った。

男 見積もりとか取らないんですか？

女 ええっ？ 取りませんよー、そんな、昼ごはんにいちいち。えっ、取るんですか？

男 じゃなくて、チラシ。

女 あー、……見積もりか。

男 ええ、ふつうは。役所とかだったら、なおさら。

女 自腹なんです。

男 は？

女 自腹で、私が作ったの。

男 自腹で…？

男、改めてチラシを眺める。

男 道理で…（クオリティが低い）。

女 え？

男 あ、いや。でも、身銭きってまで、なんで、そこまで…。

女 実物見せたら「おおっ」ってなるかなって、思ったんですよね。お役所、ほら、頭固いから。こう、網膜に直接訴えかけたほうが。こう、がつーんと。

男 それを言うなら視覚…。

女 まあ、結局固すぎてチラシでもダメだったんですけど。

男 ああ。（納得）

女 でも、こうしてほら、実際お客が釣れたってことになれば。

男 釣れた…。

女 あ、いや、連れてきたってことになれば、ほら、なんていうんですか。説得力？ 湧くと思いませんか？

男 説得力が、湧く…。

女 あ、あ、ごめんなさい、ちょっと、電話。

男 どうぞ。

女、ポケットで唸っていた携帯電話を取り出し、耳に当てる。

女 はいはい…あっ！…すみません。ええ、勤務時間だったのはわかっています。…えっと、あの、お茶っぱが売り切れててですね、どうしよう

かなーと……。はい、(腕時計を見て)20分、過ぎてますね。音、消してたもんで。あ、でもですね、収穫が……。お茶の葉じゃないですよ。(電話の相手に怒鳴られたのか、肩をすくめる)すぐ戻ります。

女、電話を切ると大きく息をつき、男を振り向く。

男 どうぞ。

女 はい？

男 ひどりで大丈夫ですから。どうぞ、戻ってください。

女 すみません……。今日、会議入ったのうっかりしてて。ちょっと行ってきます。

男 はい。

女 さくつと終わらせて、戻りますから。

男 いえ、もう。

女 手ぶらで帰るわけにはいかないんです！

男 ええ？

女 あ、いえ、一飯の恩義もありますし。

男 いっぱん？

女 ひと飯。さっきの。

男 ああ……。いいですよ。

女 いえ、そういう訳には。あー、これ、私の番号です。

女、紙飛行機の隅に自分の携帯番号を書いて男に差し出す。

男 あの。

女 会議終わったら、電話ください。じゃ、あとで！

女、走り去る。

男：…会議はそっちでしょ。ていうか。携帯持っていないし。

男、渡された紙をおみくじのように植え込みに括り付ける。
大きく伸びをする。

男 ああ…ほっとした…。

男、あたりを見回す。

男 静かだ…。急に別世界だなあ。

時々、タボと呼ばれる籠を背負ったおばあさんや、リヤカーを引いたおじいさんなどが、先の角を横切ったりしている。

男 猫、多いなあ…。なに？ さっきから俺の顔じつと見て。ついて来いって言うてんのか？ いやいやいや、ついて行かないよ…。しつこいな。

問。

猫はじつと男を待っているようだ。

男：…いや、それも悪くない。猫はしゃべらないしな。お伽話ならこういう場合、どこか別の世界に連れて行ってくれるもんだ。さて、キミは僕をどこへ連れて行ってくれるんだい？

男、猫に従ってのんびりと歩く。

男の心の声 それは、まるで迷路だった。山肌に拓かれた小さな村は、小道が縦横に通っていて。あたかも、かつてあちこちの行楽地にまるで無作為に作られ、一世を風靡しながら、あつという間に忘れ去られた、あの巨大迷路のように。自分が先ほど曲がった角はどれだったか。眩

暈のような感覚。せんせー、せんせーと泣き叫ぶ蝉。しかしそれさえがまるで静寂。蝉の声がかえってぴんとした静けさを感じさせる。止まった時間のような、止まった風景の中で来し方行く末を見失う。そう思うとき、なぜだろう、それは抑えがたい快感だった。あれ？

男、ふいに立ち止まる。

男 あれ？ どちら行っちゃった。ここ、どこだろう。

立ち尽くす男。道案内の猫を失って、まるでひとりでは歩けない者のように。

男 俺……迷っちゃった。

男が見失ったのは目の前の道だけだろうか。

思わず、あたりを見回すとそこには海を臨む墓地があった。

男……お墓？

海に向かって立つ墓たち。

男 すごい。お墓がみんな海を眺めてる。

墓と並んで景色を見る。

男……絶景だ。

ふいに墓の間から老婆が現れる。

老婆 遅かったのう。

男、ぎよっとする。

男 うわ、びっくりした…。

老婆 ようやっと来てくれた。

男 えっと…。

老婆 遅かったのう。

男 僕に、言ってます？（後ろを振り返ったりしながら）

老婆 さ、行こう。

男 行ってくって？

老婆 みんなが待ってるぞ。

男 みんな…？

老婆 ずっとずっと…あの日のままで。

男 いや、僕は…。

老婆 さあ。

男 あの、それは僕ではありません。僕は…違うんです。

老婆、男の目をじっとみている。

男 すみません…。

と、そこへもう一人別の男が現れる。

もうひとりの男 あのー、すみません。

男 今度は誰…。

もうひとりの男 ちょっと聞きたいんだけど…。

もうひとりの男、男と同じチラシを手をしている。

男 あ。

もうひとりの男 おっ、同じだー。

男 ですね。釣られちゃったんだ…。

もうひとりの男 はい？

男 あ、いえ、そのチラシ…。

もうひとりの男 あ、これ？ 拾ったんだよ。島に着いてさ、港に降り立つじゃない？ なんかやたらゴミが多いなあー、って思って拾ったらこれだったの。あんたがやったの？

男 ちがいます、ちがいます。

もうひとりの男 あー、じゃあ、あんたも拾ったんだ。

男 ええと…まあ、はい。

もうひとりの男 マグロをね、食べに来ただけだよさあ。

男 マグロ？

もうひとりの男 ここ、マグロがすごいって、聞いて、てか、見て？ ブログで。んで、船に揺られて、わざわざ。んでさあ、あれよ、船酔い？ もうマグロどころじゃないじゃん？ で、まあ、少し散歩でもして、塩梅よくしてから挑もうと思ったわけさ。

男 はあ…。

もうひとりの男 そしたら、そこいらじゅうに落ちてるじゃない、これ。ほっとする島？ 見てやろうじゃないのってことになって。男 ことになって？

もうひとりの男 自分の中で。

男 ああ、はい。

もうひとりの男 でね、これ、どこに行けばいいわけ？

もうひとりの男、ピラを差し出す。

男 わ、わからないですよね…。

もうひとりの男 あ、おたくも？ 暗号的なものかなあ。

男 暗号で。

もうひとりの男 この中になんかヒントが隠されていて、それを解かないとたどり着けない観光スポット、みたいな。

男 まさか。

もうひとりの男 だって、意味ないでしょ。何の情報もない観光チラシ。(チラシに見入る)

男 暗号化されたチラシも意味ないと思う。(ボンリと)

ふたりの男、それぞれ手にしたチラシに見入っている。

老婆 話はすんだか？ 行くぞ。

もうひとりの男 え、誰？ あんたの(知り合い)？

男 え？ いや、違いますよ、僕は。あなたじゃないんですか？

もうひとりの男 え、そう？ 行くなって、どこへ連れてってくれるんすか？

老婆 みんなが探している場所じゃ。

男 みんなが探している？

老婆 みんなが待っている場所。

もうひとりの男 探していて、待っている場所？ …おっ、さてはミステリーツアーだな。なるほど。このおばあちゃんも仕込みなんだな？

あ！ 港にチラシばらまいてたのも…。俄然面白くなってきたじゃないか、なあ、キミ。

男 でも、お仕事の途中じゃあ…。

もうひとりの男 だから、これが仕事なんだよ。

男 いや…お墓、お掃除されてるんですよ？

もうひとりの男 アイテムだよ、アイテム。

男 あ、ぼく手伝いしましょうか。(煩わしい男から逃れるために…)

もうひとりの男 おいおい。

老婆 ……どうせ空っぽじゃ。

男 からっぽ？

老婆 この墓はな、空っぽなんじゃ。

男 空っぽ…なんですか？

もうひとりの男 お、新たなるヒントだな？

老婆 それでもな、こうやって手入れせんことにはな。

男 はあ。

老婆 気が収まらんけん。

男 はい。

もうひとりの男 わかる、わかるなあ。

男 わかるんですか？

もうひとりの男 年寄りっつーのはな、共感が大事なのよ。じゃあ、おばあちゃん、行こっか。

男、もうひとりの男と老婆が去るのを見送ろうとする。

しかし、老婆が振り返り、男をじっと見るので…。

もうひとりの男 キミい…。

男 ……はい。

観念してついて行く。

場面変わって、役場。

女 遅くなってすみません！

声 おお、待ったぞ。

女 ほんとですか！

声 これ、20部な。

女 コピー、ですか…。

声 ああ、あと…。

女 はい！

声 お茶…あ、いや、コーヒー、持って来て。人数分。

女 …はい。あのお…。

声 急いでるんだ。あー、まず、コピーな。

女 はい。そうだ、チラシ、さっきのチラシ…。資料に入れて見てもらえば…。

声 おい、へんなもの資料に混ぜるなよ。

女 変なものって…。

チラシがゴミ箱に突っ込んであるのを見つける女。

女 私のチラシ…。ひどい。

ゴミ箱からチラシを回収する女。

その背中に向かつて。

声 夢語るのには学生時代だけにしとけよ、お嬢ちゃん。

女 …夢…なんですか…。

声 は？

女 夢なんですか？この島の未来…。

声 はあ？おい、お茶、まだか？

女 …すみません。吐き気がするんで。早退します！

走り去る女。

声 おおい！

場面変わって。

男・もうひとりの男・老婆がやって来る。

男 なんかい加減だなあ…。

もうひとりの男 頭が固いんだよ、キミは。肩の力抜かなきゃ。疲れちゃうだろ。

男 う…。

もうひとりの男 人生、面白がったもん勝ちだろ？ そう思わない、キミ？

と、そこへ先ほどの女が戻ってくる。

女 ああ、やっと見つけた！

男 あ。

女 ひどいじゃないですかあ。

もうひとりの男 え、何、ツレ？

男 違います、違います。

女 これ！

女、紙切れを男の顔の前に突き出す。

それは、女が自分の電話番号を書き付けたメモだ。

男 あ…。

女 おみくじじゃないんですよう。あんなところに括り付けて。

もうひとりの男 なんだかおだやかじゃないなあ。

男 ご、誤解です。(もうひとりの男に)

女 どころか？ どころをどう誤解してるっていうんです？ これ括り付けたのあなたですよね。

男 …すみません。

女 これ、おみくじに見えますか？

もうひとりの男 見えないなあ。

女 あんた、何？

もうひとりの男 あなたの味方ですよ。

女 ええ？

老婆 あんた間違ってるよ。

女 え。

もうひとりの男 お、出たな敵。

男 あなた、何言ってるんですか。

もうひとりの男 味方がいて、敵がいる。しごく当然。

女 私のどこが間違ってるんですか？

老婆 おみくじ。

女 え？

老婆 おみくじは持ち帰るもんじゃ。

女 ああ、おみくじ。え。でも、みんな括り付けてません？

もうひとりの男 確かに。お正月なんか、神社の木はおみくじだらけになってる。

老婆 みんな、間違ってるんじゃない。厄落としのために括り付けるのは、悪いおみくじだけ。

女 悪いおみくじ…。

女、男を恨めしそうに見る。

男 あ、いや、決してそういう…。

女 見かけによらず、失礼なんですわね。

男 面目ない。

もうひとりの男ふっ。

男 何笑ってるんですか。

もうひとりの男 許してやってよ。無知ゆえの過ちだ。(女に)

男 あなたも知りませんでしたよね。

もうひとりの男 キミ、細かいなあ。

男 あなたが大雑把すぎるんでしょう。

もうひとりの男 じゃ、そろそろ行こうか?(女に)

女 行くってどこへ?

もうひとりの男 彼女が案内してくれるって。

女 彼女って…このおばあさん?

もうひとりの男 彼がさあ、ナンパしたみたい。

男 は?

女 どういうことですか? 私が案内するって…。

もうひとりの男 そうだったの?

男 ええ…まあ…かな?

女 ひどい。

もうひとりの男 たしかにひどいな。

男 ちよつと!

もうひとりの男 まあまあ。しかしこれにはちよつとした理由があるわけよ。

女 なんですか?

もうひとりの男 諸悪の根源はこれさ。

もうひとりの男、チラシをひらりと出して。

男 あ。

女 あっ、それ!

もうひとりの男　なんか観光PRのために作ったチラシぽいけど。
女　ええ。

もうひとりの男　キミも知ってるの？

女　ええ、そりゃ。で、どうですか、それ？

もうひとりの男　感想求めちゃう？

女　ぜひ。

もうひとりの男　うーん。そうだな。センスが悪いのは、おいとしても…。

女　センスが悪い？

もうひとりの男　中身がない。

女　中身がない…。

もうひとりの男　ただいい島だってばかりで何がどういいのか。実際この島のどこへ行き何を見るべきなのか、なんの情報もない。

男　たしかに。

女　それはもう、この島まるごと…。

もうひとりの男　ミステリーツアーのチラシみたいなんだけどね。

女　ミステリーツアー？

もうひとりの男　そういうものほど、センスが必要なんだ。

女　センス、そうですか？　まあ、好みの問題も…。

もうひとりの男　このキャッチ「ピー」。

女　「ほっとする島」！　それだけは自信あ…。

もうひとりの男　何だ、このネーミングは。

女　あー、ご存知ないんですね。「穂戸之島」って言うんですよ、この島。ほとんどのしま…ほっとのしま…ほっとするしま。

もうひとりの男　だじゃれ…：サイテーだ。

女　さいいてい…。

男　もうそれくらいに…。

もうひとりの男　もう僕は怒りさえ覚えるね。このチラシに。

女　怒り…？

もうほとんど泣きそうな女。

もうひとりの男 だってそう思わないか、キミ。

男 もう、いいでしょう。そのくらいで。

もうひとりの男 ああ、ごめん。つい熱くなっちゃった。こう見えても俺、芸術家の端くれなんで、どうしても看過できなくてね。

男 芸術家…道理で…。

もうひとりの男 道理で？

男 あ、いや…自由な感じが。

もうひとりの男 何かに縛られてちゃ、芸術はできないよ、キミ。

男 はあ。

女 芸術家、なんですか。

もうひとりの男 まあね。だからどうしても僕は、美しいか、美しくないかで、ものごとを判断してしまうんだ。その点、この島は美しい。心洗われるねー、このどこまでも青い海。

もうひとりの男、満足げに海を眺めている。

女（男に）有名な人なんですか？

男 なんて僕に？

女 有名な人ならチャンスですよ。

男 何が？

女 売り込まなきゃ…。

思わず目が合う男と女。

女 やだな、島をですよ。

男 わかってます。しかしあなたメゲませんね。

女 慣れてますから。打たれるの。強いんです。

男 すごい……ですネ。

女 ほめてます？

男 ……もちろん。

もうひとりの男 そしてキミも、見ようによっては……んん？ ちょっと何よ、二人でなんかこそそしちやって。妬けちゃうなあ。

男 あなた、何言ってるんですか。

老婆が振り返ってこちらを見ている。

もうひとりの男 キミ、年寄りを待たせちゃいけないよ。

男 なに人のせいにしてんすか。

もうひとりの男 行くぞ。

女 ほら、行きますよ。

男 なんて。

女 まずは親しくならなきゃ。

男 僕は……。

女 ホラ、早く早く。

男 なんか、変なことになってきたな……。

蝉がしきりに鳴いている。

男 僕を先導するものが猫からおばあさんに代わった。もしかしたらさっきの猫が人間の姿を借りているんじゃないか。おばあさんの猫背を見ているともはやそうとしか思えなくなってくる。それにしてもさっきから耳鳴りがひどい。蝉の声なのか耳鳴りなのか、うまく区別がつかないけれど。もしかしたら、饒舌な二人の道連れのためかもしれない、この耳鳴りは……。そんなことを思いながら蝉のような耳鳴りを聞いているとそのうちに、耳が塞がってきた。中耳炎を患った時のように。あるいはプールのあと耳に水がたまってしまった時のように。気持ちが

悪い、というよりはひどく不安にさせるこの感覚。そう、まるで世間から……外界から遮断されるような孤独な感じ。そうだ、人間は誰しもひとりなのだ。今、この瞬間も。ひどい目眩が僕を襲う……。

もうひとりの男 おもしろい島だなー。お、また井戸。

女 ほんとは。

もうひとりの男 さっきから井戸、多いよね。

女 ですね。

もうひとりの男 さっきのなんか祠みたいにしてあったし、ここのは蓋に鍵までついてる。不思議だなあ。

女子供なんかの間違って落ちたら困るからじゃないですか。

老婆 川もない小さな島じゃけ、水は貴重なんじゃ。井戸も神さんのように大事に大事にしたもんじゃない。

女 ……へえ。

もうひとりの男 面白い、実に面白い。

鐘の音がどこからか。

しきりに鳴っていた蝉が途切れる。

もうひとりの男 ん？ ん？

男 あれ……。何ですか、今の。

女 え？

男 鐘、鳴ってましたよね。

もうひとりの男 鳴ってたなあ。なんなの？

男 なにかの合図ですか？

女 ……。

男 あの。

女 ……すみません。

男 え……。

女 無責任ですよね。

男 何が？

女 あんだけこの島推しといて、初めての質問にも答えられない。

男 あ…知らなかったんです…ね。

女 すみません。

男 いや、別に…。

女 無責任なんです、私。偉そうにあなたに案内するなんて言ったけど、ほんとはこの島のこと何もわかってないんです。

男 何もそこまで…。

女 どうせ私なんか、仕事だっていつまでもお茶汲みばかりだし。島のことだって鐘だって、井戸だって知らないし。私の居場所なんて、どこにもないんです。

男 ……なんか極端だなあ…。

もうひとりの男 あゝあ、泣かせちゃった。

女 泣いてませんッ。

もうひとりの男 そりゃ残念。

男 あなたさっきからそうやって混ぜっ返すようなことばかり…。

もうひとりの男 ええ？ 俺？ 俺が悪いの？

男 そんなふうには…。

もうひとりの男 よくないなあ。責任転嫁は。

男 ちよつと、待ってください。

女 ちよつと待って。

男 え？

女 もめてる場合じゃないわよ。

男 や、そもそもああなたが…。

女 おばあさんは？

男 え？

女 おばあさんがいない。

もうひとりの男 あれ、ほんとだ、どこいった？

あたりを見渡し探す3人。

男 いませんね。

もうひとりの男 しょうがない、じゃあキミ案内…。

女 手分けして探しましょう！

男 え…俺たちが？

もうひとりの男 そうだ、探そう。

男 あなたさつき違うこと言いかけてましたよね！

もうひとりの男 え、あなた探さないつもりですか？

男 はい？

女 探さないと。

男 だからなんで…。

女 ほっとけないでしよう。

もうひとりの男 もちろんだ。ほっとけない。

男 なんてそうなるんですか。

女 相手はぼけてんのよ。公務員的にまずいわよ、見てみ見ぬフリは。

男 え、ぼけてるの？

もうひとりの男 そうだ、からっぽの墓掃除なんかしてたんだけ。ぼけてるだろう。

男 あなた、率先してついていこうとしてたじゃないですか。

女 非常事態には常に最悪の事態を想定すべきです。

男 非常事態なんですか？

もうひとりの男 ありがたい。ひじょうにありがたい。

男 なんなんですか、あなた。

女 私、こっちのほう見えます。

もうひとりの男 じゃあ、僕、あっち見えます。

女 あなたは、この中、探してみてください。

男 え、ここって……。

女 頼みましたよ！

二人捌ける。

女が指差した先には小学校があつた。

男 ここは……学校……？ がっこう……。

男、つばをぐくりと飲み下して、その学校に足を踏み入れる。

場面は校舎の中へと移る。

誰もいない教室に蝉の音が響く。

男、教室に入って。

男 この教室で最後か……いるわけないよな、こんな所に……。

誰もいない教室を見渡して。

男 夏休みの教室ほどノスタルジーを感じさせる場所はないな……あ、俺、立派な不法侵入か？

蝉の声は遠くになっている。

男、大きく息を吸うと、見えない生徒に向かって話かける。

男 おはよう。みんな、元気だったか。全員無事に揃って何よりだ。しかし、いつまでも夏休み気分を引きずってはいかんぞ。今日から2学期だ。しっかり気をひきしめて、心新たに頑張ろう……心新たにがんばろう……まだ鳴いてやがる。(蝉が)がんばるなあ……。

男、座り込んでしまう。

やがて自らも小さくつぶやく。

男 せんせー、せんせー、せんせー……せんせー……。

男、耳を塞ぐ。

ふと目線の先に一冊の本を見つける。

無意識のうちに、あるいは導かれるようにその本に手を伸ばす。

男、本を手にとる。

と同時に、半鐘の音、どこからか。

男え。

蝉の声ひときわ。

蝉の声の中に「せんせー」「せんせー」と子供の声が混ざっている。

男え……？ 空耳？

空耳ではなかった。

子供たちが次々に姿を表す。

男 え。 声たち せんせー！ せんせー！ せんせー！ せんせー！ せんせー！ せんせー！

教室中にあふれる子供たち。

教室の景色も先ほどまでと変わっているようだ。

黒板には「7月25日水曜日」の文字。

どの子もみすばらしいなりをしているが、希望に満ちた眸をもつ小学生だ。
子供たちは口々に男に朝の挨拶をする。

男 え？ え？？ なに。

チカ 先生、おはようございます。

ユキ おはよう、先生。

男 え、おはよう？

テル 先生、おはよー。

男 あ、今から何かあるのかな？ こころ。

テル 何かあって？

男 学校行事かなにか……早く出ないとヤバイな。ごめんね。

男、教室から出て行こうとする。

チカ 先生。

男 え。

チカ 私たち、先生がいらっしゃるのをずっと待っていました。

男 え。

子ら 待っていました。

アキ いつまで待っても授業が始まらなくて。

クニ すごく困っていました。

ルミ せんせー。

ユキ 先生！

アキ お願いします！

男 ごめん、僕は違うんだ。

トシ 違う？

ユキ 違うって？

男 ほら、違うだろう？

子供たち、しきりに首をかしげている。

男 君たちの先生じゃない。

チカ でも、私たちずっと待ってたんです。

テル ずっとずっと待った。

チカ 先生を待ってたんです。

男 先生……か。でもそれは僕じゃないよ……。

ルミ どうして？

アキ どうして違うの？

男 僕はこの教師じゃないし。それに、第一僕は正式な先生じゃないんだ。それももうやめようかどうしようか悩んで……何いってんだ、俺。
ユキ せんせい、先生をやめちゃうの？ 先生も、行っちゃうの？

男 え……行くなって……？

チカ 先生、やめないで。

アキ やめないで。

子ら 先生！

男 なんて。

チカ 朝礼がなくなつて。

ルミ 教室に戻つて。

ユキ ずっと待ってたのに。

テル 先生来ないから。

アキ 男子は女子をいじめるし。

トシ 一年生は泣き出すし。

チカ ほんとに大変で。

男 わかった、わかったから、順番に話を聞くから。

子らはあい。

男 まず、キミたちはどうして学校へ来たの？

クニ 先生、何言っさんの。子供は学校へ来るもんじゃ。

男 確かにそうだね。でも、今は夏休みじゃないの？

テル 夏休みは、なくなった。

男 え、どうして。

クニ だって、今、お国は大変なときやろう？

トシ 俺らだけ休んだり遊んだりしたらいけないって。

男 お国が大変……。ずいぶん古めかしい言い回しだな。まあ、確かに、不景気だし、外交問題もアレだし……。でもだからって夏休みがないってのは……。あれか、夏期講習みたいなもんか？ 最近の小学生は大変だな。こんな田舎の島にまで中学お受験の波が……。この子たちの親も……。怪物……？

思わず身震いする男。

クニ 先生、どうしたん？

テル 先生、大丈夫か？

アキ 先生？

男 あ、ああ。ごめん。

子供たちの顔をまじまじと見てしまう男。

ルミ せんせ、具合悪いん？

ユキ 大丈夫、先生？

男 ……大丈夫だよ。ありがとう。

ルミ・ユキ えへ。

ユキ 先生、私たちちゃんと信号でできるようになったよ。
男 信号？

ルミ、旗を持ってくる。

ルミ 見て見て先生。

男 これ、何に使うの？

クニ 先生、知らんの？

トシ ようし、先生に見せちゃろうぜ。

子ら おう！

子供たち、手に手に紅白の旗を持ち、手旗信号を披露する。

男 すごいな、みんな。今のは？ 運動会の練習かな？

トシ 運動会？ 何言ってるん？

クニ 軍事教練じゃ。

ルミ 軍事教練！

男 軍事教練？？

チカ 先生、授業はじめようよ。

男 授業……。

ルミ ちゃんと、教科書持ってきたよ。

ユキ 私も、ほら！

男 あ、ええと……君たちの担任の先生は？ 今日はいないのかな？

テル うん。いない。

トシ ずっといないよ。

男 ずっと…ひよっとして。精神を病んで…増えてるもんな、教師の心の病…。そうだ、何も俺だけじゃない。

アキ 先生、何ぶつぶつ言ってるの？

ルミ 先生？

クニ 先生？

子供たち、口々に「先生」と呼びかける。

まっすぐな眸が男を貫く。

男 子供たちの瞳がまっすぐ僕に向いている。こんな感覚、今まであっただろうか…。あったのかもしれない。だけど…思いだせない…。

チカ 先生？

男 あ、ごめん。何でもないよ。

チカ 先生、授業始めよう。

男 授業、何の授業かな。

チカ 国語。

ルミ こくごー。

ユキ ユキ、国語すきー。

男 そうか、ユキちゃんは国語が好きか。

ルミ ルミも！ルミも好き！

男 そうかそうか。キミたちは、学校が、好きか？

ユキ 好き！学校好き！

ルミ ルミも、ルミも学校好き！

テル 俺も！

トシ 学校来たらみんなて遊べるしなー。

男 そうか。キミたちは仲がいいんだな。

アキ えー、男子は意地悪だよな。

ルミ ねー。

千カ 先生、授業！

千カ、教科書を男の鼻先に突きつける。

風が強くなったのだろうか。ゴウゴウと音がする。

男 え。なに、あの音。

テル 友軍機じゃ！

男 友軍機？

子供たち、窓辺に駆け寄る。

テル あ、ほら、パイロットが見える。おおいー！

子供たち、しきりと手を振っている。

男も子供たちにつられて窓辺に行く。

男 なんだ？ 飛行機がこっちに向かってる。

子ら おおい、おおいー！

飛行機はまっすぐこちらに向かっているようだ。

トシ ちがうっ あれは友軍機やない！

クニ 敵機じゃ！ 敵機が攻めて来たあ。

千カ なんてっ。空襲警報解除になったばかりやん！

ぱりぱりと音をたてて敵機が近づいてくる。

ルミ怖いよ、先生！
アキ助けて先生！
子ら先生ッ！！

パニックを起こす子供たちがそのまま時を止める。(ストップモーション)

男なんだ、何が起こってるんだ！？

大きな爆音がして、暗転。

機銃掃射の音だけが響く。それはまるでトタンを打ち付ける雨のように。

照明が戻ると、そこはまるで何事もなかったのような教室。

先ほどの子供たちは気配すらない。

蝉の声。

男は、ひとり茫然と立ち尽くしている。

男 いやいよおかしくなったのかな、俺……。だとしたら……。ずいぶん優秀な脳だ。ここまでありありとして生々しい妄想……。病院、行かないや……。

出て行こうとする男。

先ほど拾った本を手を持ったままなのに気がつき、引き返し、本を教壇に置く。

とそこへ、女ともうひとりの男現れる。

もうひとりの男 ああ、いたいた。

男 あ……。

女 ああ、ほんとだ。いた？

男 え？ 子供たち？

女 子供？ 何言ってるの？ おばあさんだよ、いた？

男 あ…ああ。

もうひとりの男 いたのか？

男 あ、いや。おばあさんは…。

もうひとりの男 いないのか？

男 あ、ああ。

もうひとりの男 どっちなんだよ。

男 おばあさんは、見てない。

もうひとりの男 おばあさんは？

女 ちゃんと探した？

男 あー、いや…。

もうひとりの男 キミ、ほんと煮え切らないなあ。

男 いや、ちょっと、混乱して…。

女 混乱？

もうひとりの男 あれ？

女 どうしたの？

もうひとりの男 携帯がつかないんだ。この島って圏外なの？

女 そんなことないですよ。え、やだ、私のも。あなたのは？

男 ごめ…、俺携帯持っていない。

もうひとりの男 ほんと使えないな。

男 え？

もうひとりの男 だから、携帯が。

男 ああ。

女 電波的不具合ですかね？

男 は？

もうひとりの男 とりあえず、ここにもいないようだから、交番にでも届けて、マグロでも食べに行きますか！
男 僕は結構です。

もうひとりの男 なんでー。ここ来たら、マグロ食べなきゃうそでしょ。

男 もう、食べたんで。

もうひとりの男 なにそれ。抜け駆け？

男 ええ？

もうひとりの男 ひどいなあ。

男 いや、なんで…。

もうひとりの男 信じられない。ひどい裏切りだ。

男 裏切りって、食べたのはあなたと会う前…。

女 ちよつと、ちよつと。

男 え。

女 私が連れて行っただってことは内緒ですよ。

男 なんて。

女 私の心証悪くなっちゃうじゃないですか。

男 は？

女 ひとりで勝手に行ったことしてください。

男 いいですけど。

女 よかった。

もうひとりの男 あ、雨。

いつの間にか蝉の声は雨の音に変わっていた。

女 え。ほんとだ、結構降ってますね。

なるほど、激しい雨音。

もうひとりの男いきなりすげーな。スコールか？ 熱帯化してるなあ、この島も。こんなところで環境問題を考えると。女こりゃ、やむの待つしかないですなー。

窓の外からはゴウゴウと音がし始める。

もうひとりの男 なんだあの音。

女 なんか、外暗くなってきましたね。

もうひとりの男 嵐か？

女 おばあさん、大丈夫かなあ。

もうひとりの男 キミ、やさしいなあ。

男 どうか建物に避難してますよ、きつと。

ほうひとりの男 キミ、冷たいなあ。

男 え、普通でしょ。

もうひとりの男 うまかった？

男 え？

もうひとりの男 抜け駆けしたやつ。

男 ああ、マグロ？

もうひとりの男 自覚はあるんだ。

男 自覚って？

もうひとりの男 抜け駆けしたって自覚。

男 あなたがそう言ったんでしょう。

もうひとりの男 うまかった？

男 なんか、殺気を帯びてませんか？

もうひとりの男 うまかった？

女 そういえば、芸術家さんなんですよね。(話題を変えようとして)

もうひとりの男 うん。

女 島へは何しに？

もうひとりの男 マグロを食べに。

女 ああ。(変わらなかった)

もうひとりの男 うまかった！？

男 ……。

女 あのー、芸術ってのは、どういう？

もうひとりの男 何だと思う？

女 絵描きさん。

もうひとりの男 ー、近いけど、違う。キミ、何だと思う？

男 さあ。

もうひとりの男 ノリが悪いなあ、なんか言えよ。何か？ 自分はもうマグロを食っちゃったから、食ってない男には付き合えないっていうアレか？

男 はあ？

女 お願いします、なんか言ってください。ずっと続きますよ。マグロ責め。

男 えと…陶芸家？

もうひとりの男 全然違う。

男 ……。

女 あっ、ダンサー？

もうひとりの男 惜しい！ はい。

男 ……書道家。

もうひとりの男 まったくの外れ

男 はいはい。

女 えー、何だろう。

もうひとりの男 知りたい？

女 はい。

もうひとりの男 知りたい？
男 や、別に……。

女に肘鉄を食らう。

男 知りたいような……気がしてきました。

どこか遠く電話が鳴っている。

もうひとりの男 電話。

女 え？ でんわ？

もうひとりの男 鳴ってない？ 電話。

女 あ、ほんとだ。

もうひとりの男 借りればいいんじゃない？

女 借りる？

もうひとりの男 電話だよ。固定電話ならつながるっしょ。

女 ああ、そっか。

もうひとりの男 職員室かなあ。

女 ですかねー。

もうひとりの男 ちょっと行ってみるわ。

男 ああ、はい。

女 私も。

男 はい。

もうひとりの男 キミは？

男 かけるところ、ないんで。

もうひとりの男 あ、そ。

二人、出ていく。

男、窓を見る。

男 飛行機：…あんなにはっきりと見えるなんて。かなりやばいよな。

男の目が再び本にとまる。思わず手に取る。

男：…なんか耳鳴りがする…。

雨の音はいつの間にか蝉の合唱にとって代わられてゆく。

男 え、雨、やんだ？

蝉の声の中に、子供の「せんせー」とささやく声が混ざってゆく。

しきりに頭を振り、耳を気にする男。

蝉の声に紛れて子供たちが姿を現し始める。

子供たちはまるで湧くように、客席から現れる。

ルミ、途中で転んだりしながら。

ルミ 待ってー。靴ぬげたー。

子供たち舞台上に上がってくる。

トシ せんせい、おはよー。

チカ おはようございます。

などと口々に。

男 え…、またか…。

男、がっくりする。

ルミ せんせー。せんせー、ここ痛い。

男 どこ？

ルミ ここ。

男 ああ、すりむいてるね。転んだのかな？

クニ ルミのやつまた甘えとる。

テル こいつ、こないだ弟ができたもんやけ、構ってもらえんごとなったもんやけ。

トシ こげえやってせんせーに甘えるんで。

ルミ 違うもん。ほんとに痛いもん。

クニ どこがじゃ。見せてみい。

ルミ いやじゃ。クニちゃんなんかに見せん。

クニ やっぱうそじゃ、うそじゃ。

トシ ルミの甘えた(甘えん坊の意)。うそつき毛虫。

ルミ 嘘じゃなーい。

クニ テル・トシ うつそつき、うつそつき、うつそつき。

今にも泣き出しそうなルミ。

男の上着の裾を握って離さない。

男 ちょっと、君たち、やめなさい。

クニ・テル・トシ、気をつけの姿勢になる。

男 えっと……小さな女の子を三人がかりでいじめるのってのはかっこよくないな。
クニ はい。

テル ごめんなさい。

トシ すみません。

男 ……素直だな。これは俺の願望なのか？

ルミが、男の上着の裾を引っ張っている。

ルミ 先生、遊ば。

男 え？

ルミ あーそーぼー。

クニ おう、遊ぼう、遊ぼう。

テル 俺も遊ぶー。

男 遊ぶ？ そうだ。本来子供はそうでなきゃいかん。結構、結構。多いに結構。
クニ けっこう、けっこう、こけこっこー。

子供たち、男の言葉が気に入ったようだ。

ロタに「けっこー、けっこー。こけこっこー」と言っではしゃいでいる。

ユキはその輪に入らず、寂しげにしている。

男 どうしたの？ ユキちゃん、だったね。元気ないけど。

ユキ 明日な、おにい(兄)が遠いところに行くって。

男 遠いところ？

ユキ ゆうべユキに言ったの。もう会えんかもしれんって。ユキにおかあのこと頼むって。

泣き出すユキ。

男 大丈夫だよ、ユキちゃん。お兄さんはなんで、そんなことを？ きっと、また会えるよ。
ユキ ほんと、先生？

男 うん、きつと。

チカ 先生、そんないい加減なこと言っちゃだめだよ。

男 え。

チカ うちの父ちゃんは帰ってこんかったよ。

ユキ うう……。 (再び泣きかける)

アキ チカちゃん。

チカ ……ごめん。ユキのところはきつと帰ってくるよ。

ユキ チカちゃん……。

男 あの、お父さんはどこへ行ったの？

チカ 南方。

男 南方？

ルミ ねー、遊ば。

男 え、ああ。

ルミ ケツコー先生。

男 ケツコー先生ー？

トシ ケツコー先生、かけっこしよう、かケツコー。

男 かけっこ？

クニ かけっこ、かけっこ、かけっこー！

ルミ あたしもする。あたしも！

クニ ばーか、女のお前についてこれるもんか。

アキずるい、男子ばっか。

男わかった、みんなでかけっこだ、な。
ルミわーい。

子らケッコー、ケッコー、カケッコー。

男よーし、みんな並んで。

チカ 行こ、ユキ。

チカ、ユキも列に並ばせる。

子供たち、一列に並ぶ。

テル 俺が合図する。

ルミ ずるい、あたしがする。

男 わかった。せーので、みんなで合図だ。いいか？

子らはあい。

男 せーの！

子ら よーい、どん。

よーいどん、のかけ声とともにスローモーションに。

スローモーションでゆっくり駆け抜ける子供たち。

男 なんとという素朴な子供たちだ。凝り固まった僕の心がほぐれてゆく。こんな子ばかりならば、学校生活もどんなにか愉快だろう。いっそこのままこの島の先生になってしまおうか。これが僕の妄想でないのなら。

動きが戻る。

子供たち、息を切らしたり、やったあなどロ々にわいわいしている。

男 さあ、次は何して遊ぼうか。

クニ お山に行きたい！

テル ああ、俺も行きたい。

千カ 何言ってるんの、無理に決まってるやろ。

男 お山って？

トシ お山はお山。

ルミ ほら！

子供が指差す窓の向こうには山が見えていた。

千カ 窓から見えるあの山は。

アキ 島にたったひとつのお山。

男 へえ。なんて山？

ルミ 遠い山。

男 遠い山？ それは山の名前なのかい？

トシ そうだよー。遠い山。

男 ふうん。そりゃ奇妙だ。

ルミ 奇妙って。

男 第一ちつとも遠くない。むしろ近い山ってほうがしっくりくる。ひよいと散歩にでも出かけたくなる近さだ。

千カ 散歩には行けないよ、あの山は。

男 どうして？ あ、もしかして、遠近感がおかしなことになってるのかい、あの山は。あり得るな。この島に来てからおかしなこと続きだもの。

うん、きっとそうだ。近くに見えて実はうんと遠い、遠い山とか？

アキ 遠くはないけれど。

クニ 毎日遊んだ山だけ。

トシ でも今はだめなんだ。

男 はあ、危ないから立ち入り禁止になったんだな。子供の事故でもあったんだろう。

ルミ 事故？ 事故っちゃん(何)？

男 お友達の誰かが迷子になったとか、ケガをしたとか。

クニ 迷子なんかならん。

テル 庭みたいなもんやもんな。

男 山が庭かあ。今時めずらしいな。この島の子供たちはのびのびしてるんだな。
クニ 遠い山にはおれらの巣があったんで。

男 巣？

テル 秘密の巣。

男 秘密基地か！ へえ、すごいな。

トシ あーあ、俺たちの巣、どうなったかなあー。

男 どうして行けなくなっちゃったの？

チカ それはね…。

鐘が激しく叩かれる音。

男 あ。

テル 警報じゃ。

チカ みんな、走るよ！

男 え、なに？

チカ 先生も、早く！

男 早くって、どこへ？

トシ 防空壕じゃ！

子供たち、転げるように教室を出る。(客席へ)

男 防空壕？？

男、子供たちの後を追って出ようとする。
そこへ、女ともうひとりの男が戻ってくる。
いつの間にか雨音も戻っている。

女 ダメでしたあー。

男 え。

もうひとりの男 職員室、鍵かかったた。

男 あの…子供…見たりしません…よね？

もうひとりの男 子供？ いるわけないだろう、夏休みじゃないか、今。

女 大人も子供も、猫の子一匹いませんよ、この校舎の中。

男 猫の子一匹…。あの、鐘、鐘は鳴ってました、よね。

もうひとりの男 はあ？

男 鐘です、鐘。

もうひとりの男 鳴ってたのは電話、だ。

男 電話…。

女 雷は鳴ってたかも、遠くのほうで。

もうひとりの男 大丈夫か、キミ。

女 で、なんでしたっけ？ 何の話してましたっけ？ 私たち。

もうひとりの男 ひどいなあ、俺の仕事、聞いてたんじゃないか、ノリノリで。

女 でした、でした。

もうひとりの男 で、知りたい？

女 知りたいーい。

女、興味を示さない男に肘鉄を食らわす。

男 あ、はい、知りたいです。

もうひとりの男 そう？　じゃあ、言うけど。実は俺、仏師なの。
女 ええ？

もうひとりの男 仏師、仏師。

男 ブッシ？

女 なんですか、それ。

男 もしかして、仏に師匠の師を書いて…。

もうひとりの男 仏師。

女 なんすか、それ。

もうひとりの男 仏様を彫るんだよ。

問。

男女 えええええええええええええ。

もうひとりの男 え？　え？　それなんの驚き？

男 一番遠い気がする…。

女 すごーい。あれ、彫ってる人、いるんですね。

男 そりゃ、いるでしょ。

女 この島へは、やっぱりあれですか？　なんかこう仏様を彫るための心の癒しを求めて…。

もうひとりの男 マグロを求めて。

女 マグロだって。

男 さっきからそうおっしゃってる。

女 今どんなの彫ってるんですか？

もうひとりの男 今はね台座。

女 台座？

もうひとりの男 仏様の足下の、花の形した台。

女 ああ、なんとなく。へえ、それも彫るんですか。

もうひとりの男 もちろん。

女 どうして仏師になろうと思ったんですか？

もうひとりの男 国宝第一号って何だったか知ってる？

男 え、何ですか、急に。

女 何かなあ。国の宝でしょう。富士山とか。

男 おいおい。

もうひとりの男 惜しい！

男 えええええ。

女 え？ 惜しい？ なんだろう。

もうひとりの男 ヒントあげようか？

女 お願いします。

もう一人の男 じゃあねえー…。

男 広隆寺半跏思惟像。

もうひとりの男 ！

女 え？ え？ ハンカチ？

男 広隆寺半跏思惟像。または広隆寺弥勒菩薩像。

もうひとりの男 あー、もう。なんで言っちゃうかな。

男 なんてって…聞かれたし…知ってたから。

もうひとりの男 つまんないでしょ、言っちゃったら。今、この人から答えを引き出そうとしてたのに。あのね、最初から正解を与えればいって
もんじゃないんだよ。

男 ……。

女 広隆寺……なんてしたっけ？

もうひとりの男 半跏思惟像。片足をね、もう一方の腿にのせる姿勢を半跏って言うんだよ。半跏の姿勢で、こう、右手を軽く頬に触れてね、
物思う弥勒さまの像なんだ。

女 なんか、教科書かなんかで、見たことあるようなく。

もうひとりの男 うん、教科書にも載ってるね。だけど実際見たらもう全然違うんだ。すぐみがね、あるんだ。それほど美しいんだ。美しいんだよ、これが。もうね、俺一目惚れ。それで俺も生み出したって思ったんだ。自分のこの手でね。

女へえ。で、できたんですか、あなたの弥勒さま。

もうひとりの男 それが、できたのは台座ばかり。今でね、台座は36個めなんだ。

男 36ー？ どうかしている。

もうひとりの男 どんなに美しい台座も彼女を迎えるには足りない。そう思って先に進めないんだな、これが。

女 ああ、なんか、わかるなあー、その気持ち。

男 え、わかるんですか？

女 きつとすごく魅力的な女性なんです。

もうひとりの男 あ、性別は超越しちゃってるんだけどね。まあ、惚れ込んだ便宜上、ね。

女 仏像はまだ一体も作ってないんですか？

もうひとりの男 俺はね、一体だけって決めてるんだ。だからそうやすやすとは取り掛かれないんだ。

女 それで台座ばかり？ ん、なんかロマンティック。

男 え？

もうひとりの男 今度の台座で36個め。36と書いてミロクと読む。だからね、今度こそ、彼女を迎えられそうな気がする。

女 いやいよなんですけどねー！！ でも大丈夫なんですか？ 仏像はまだ一体も彫ってないんですよ。

もうひとりの男 ドラえもんとか、仮面ライダーとか、ビリケン様とか、招き猫とか、いろいろ練習はしてるんだ。

男 それは仏師と言えるのか？

もうひとりの男 自覚の問題さ。俺は仏師としての自覚がちゃあんとある。

女 ええ、自覚は大事です。

もうひとりの男 キミの仕事はなんなの？

女 私は、役所です。

もうひとりの男 そうなんだ。

女 つまんない仕事ですよ。

もうひとりの男 やりがいを感じてないの？

女 やりがいがある。…つぶされちゃいました。

男 え……だって、キミあんなに生き生きと僕にゴリ押ししてたじゃないか。

女 ゴリ押しして。

男 ごめん……。

女 すかしっぺですよ。

男 すかしっぺ？

女 最後の力振り絞ったんです、これでも。でもね、ダメだった。結局空振り。すっかすかのすかしっぺ。ばかみたい、私。上はね、ただ言われたことだけやってる従順な部下を望んでるんです。レールから外れちゃだめ。自分で何かをしようとしちゃだめ。

もうひとりの男、女の頭をなでなでする。

女 え……？

もうひとりの男 弥勒さまってね、未来仏なんだよ。

女 みらいぶつ？

もうひとりの男 未来を救う仏様なんだ。

女 え……よくわかんないけど、すごそう。

もうひとりの男 地球どころかさあ、太陽系まで滅びちゃった、世界の終わりに現れて、救済からあぶれちゃった人々を救うんだ。すごいヒーローだと思わない？

男 ヒーローって……。さっきは女性扱いしてたような……。

もうひとりの男 キミ、細かいなあー。

女 よくないですよ、そういうの。

男 ……ごめんなさい。

もうひとりの男 未来を救うってすごいと思わない？ 地球も宇宙も滅びちゃうような悲惨な世界にも救いはある。未来はある。光はある。今に絶望しちやいけないよ。なあーんてね。

男 気障な台詞。

女 また！

男 ごめん。

女 未来の光。いいですね。

もうひとりの男 でしょ。

女 私も、あなたの彫る弥勒さまに会いたいなあ。

もうひとりの男 うん。そのときが来たら会わせてあげるよ。

男 未来もいいけど、僕たちには今、救済が必要だと思いませんか。

もうひとりの男 夢のない男だなあ。

女 救済というか、傘ね、今必要なのは。

もうひとりの男 もはや傘じゃ防げないでしょ。飛んでっちゃうよ。

しばしゴウゴウという風の音を聞く。

女 すごい音。

男 どこかで聞いたことのあるような…。

もうひとりの男 この音…。

土砂降りの雨の音。

女 いやな音。トタンにでも当たってるのかしら…。

男 この音は…。

もうひとりの男、教卓の本に気づく。

もうひとりの男、なんだ、この本。

女 なんですか？

女、のぞき込む。

女 「穂戸乃島の歴史？」
もうひとりの男 来るぞ。
女 え、なに？

ひととき大きな雷鳴。

眩しい光。

暗転。

一体何が起こったのか。
照明が入る。

男 ううう……いってえ……。

気が付くと、女ともうひとりの男はいない。

倒れた勢いで本が投げ出されている。

男 あ、あれ？ ちょっと、どこいつちゃったんですか!？

と、子供が走り込んでくる。

ルミ せんせい!

男 ひっ。

ルミ 先生？

男 あ……ああ……キミ。

ルミ 先生、おはよーございませう。

男 キミたしか……ルミちゃん？

ルミ 今日、日直やにー。(「日直なのー」の意)
男 日直……。

ルミ、黒板に名前を書いている。
男、ぼんやりとそれを眺めつつ……。

男 まだ続くのか、この妄想は。

子供たち、次々と入って来る。

チカ おはようございまーす。

男 ああ、おはよう、って何、条件反射！……つま、いつか。

トシ ケッコー先生、またかけっこしよう。

男 ケッコー先生。

トシ いしししし。

男 いいぞ、しよう。

テル やったあ。

男、早くも子供たちの様子に癒され始めたようだ。

チカ ちよつと男子、その前にやることあるでしょう。

男 やること？

不意に笛の音が鳴り響く。

唐突に男の軍人と、女軍人が現れる。

それぞれ、もうひとりの男、女に似ている。

女軍人せいれーっ！

子ら、信じがたい機敏さで列になる。

男 えっ。すご。。。。

軍人 番号！

子ら、番号を唱える。

なぜだか36まで数える。

そんなにたくさんいただろうか。

(子役の数足りなくても36まで繰り返す。)

子 ー。

・
・
・

子 36。

男 36、えっ、36？ そんなにいたか？

女軍人 何をしとる、貴様も並ばなんか！

男 あの、あなた何してるんですか？

女軍人 馴れ馴れしい口を聞くな！

女軍人いきなり男を殴る。

男 なっ、何をするんですかあ。

ルミ先生、こっち、こっちだよ。

子供たち、男を決められた位置に並ばせ、麻袋を持たせる。

女軍人 全員いるかー。

子ら はいッ。

軍人 今日も、授業の前に、遠い山に砂袋を運ぶ。

子ら はいッー！

男 ちよつとあなた、何やって…。

チカ しっ。

男 え？

チカ また殴りたいの？

男 え…。

チカ 殴られるのがイヤなら、おとなしく言うこときくしかないの。形だけでもね。

男 ずいぶん…大人びた言葉を使うんだね。

チカ そうしないと生きていけないから。

男 そうしないと生きていけない…これが…教育か？ 僕の生徒も…あのバレエ部も…。ソウシナイトイキテイケナイ…。

ルミ どうしたの？ 先生。怖い顔して。

男 あ、ああ、ごめん。なんでもないよ。

女軍人 背(せい)の順にならべー！

子ら はいッ。

男 一体何が起こっているのか。起ころうとしているのか。僕の妄想の暴走はぐるぐると加速して…あ…目眩がする…。

子供たち、そんな男を尻目に、たくましく、愛らしく、慣れた様子でけなげに並ぶ。

アキ先生、大丈夫？

チカ すぐに慣れるよ、先生。

男 すぐに、なれる？

軍人 袋を渡す！

子ら はい！

子供たち、砂の入った袋を一つずつ渡される。

子供たちは赤ん坊を背負うように、砂の入った麻袋を背負って歩来だす。

もう何がなんだか理解不能で、その様子を眺めるばかりの男。

軍人 おい、何をしとる。さっさと並ばんか。

男 え。いや、僕は…。

チカ 早く！

チカ、男を列に並ばせる。

軍人 いいか、しっかり足を踏ん張って、ひとつぶの砂もこぼすんじゃないぞ。

女軍人、ピリピリと笛を吹く。

女軍人 進めー。

子供たち、歩き出す。

男も、女軍人にジロリと睨まれて、子供たちの動きに従う。

男 ねえ、これどこに向かっているの？

ルミ 遠い山だよ。

男 遠い山？ 君たちの巢があると云ってたあの山か？

トシ そうじゃあ。

男 あれ？ 行けないって言ってなかったか。その山。

クニ 行かないといけないんだ。みんな。

男 行けない、じゃなくて、行かないといけない、なのか、ほんとは。

テル みんなで砂をお山のとっぺんまで運ぶんだ。

男 なんの為に。

テル 知らん。

チカ 監視所ができるんだって。

男 監視所？

チカ 遠い山のとっぺんに。

トシ 監視所かー。なんか、かつこいな。

ルミ 監視所、監視所。

男 ねえ、キミ。ええと、名前。

チカ チカ。

男 チカちゃん。監視所って、一体何を監視するんだい？

チカ 敵の潜水艦を見張るんだって。

男 敵の潜水艦？ 敵って？？ なんて、こんなとこに。尖閣でも竹島でもないだろ、ここは。誰に聞いたの？

チカ うちが一番上の兄ちゃんが兵隊さんやけん。監視所作るために、帰って来たけん。

男 兵隊…自衛隊か？ かしななんだって、こんな子供を働かせる？ 体験学習か？ いや、違う、これは俺の妄想だ…。

男、軍人と目が合って。

男 ようこそ、僕の妄想へ。

軍人 貴様、何をわかのわからんことを。

チカ 先生！

千カ、男を列に戻す。

と、ユキが重さに耐えかねて歩けないでいる。

男 大丈夫？ 貸してごらん。

男、ユキから袋を受け取り、自分が2つ持つ。

ユキ 先生、すごいね。

男 ほら、楽になったろう。

ルミ 先生、力持ち。

千カ そんなことしても無駄だよ。

男 なんて。

ピリピリと笛が鳴る。

女 軍人 そのちび、戻ってこい！ 袋を持ってーい。怠けるなッ！ ばかもの！

ユキ、さっきよりたくさん砂の入った重い袋を背負わされ、転ぶ。

男、駆け寄る。

男 大丈夫？

千カ 兵隊さんの目を盗んだりなんかできないんだから。

男、軍人に歩み寄る。

千カ ちよつと、先生。

男 これが僕の妄想なら、僕に責任がある。

千カ 先生？

男 ちよつと、待って下さい。なんで、こんな小さな子供に、こんなことさせるんですか。

軍人 なんだ貴様？

男 この子たちの…先生です。

軍人 先生？ 先生なら、子供たちに、もっとがんばれと叱咤激励するのがつとめだろう。

男 教師のつとめは、子供たちをまつすぐ健やかに育むことだ。こんなつらい惨めな思いをさせることじゃない。

軍人 ばかもものッ。

軍人、男を殴る。

男 何を。

軍人 この戦に負けたら、こいつらはもっと惨めなつらい思いをするのだ。それがわからんのか！ 貴様それでも教師か！

男 はあ？

軍人 すべてはこいつらのためだ。こいつらのために殴ってるのだ。

男 子供たちのために殴る？

軍人 そうだ。子供たちの未来のために。

男 子供たちの未来のため…。

千カ、男の手を引っ張って、軍人のもとから離す。

千カ 先生、何やってんの。

男 何って。ひどいじゃないか、あいつら…。

千カ 先生、もうやめて。

男 なんて。

チカ よけいひどい目に遭うから。

男 ごめん。。。ごめん。

ユキ せんせい？

ルミ 先生。。。。

ユキ、不安そうに男を見る。

男 ごめんな、ユキちゃん。ほら、半分こっちに移そう。

チカ 先生。。。。

男、ルミの砂を減らしてやる。(自分の袋に移す)

テル 先生はやさしいなあー。

男 こんな小さな子が大変な思いしてるんだ。助けてやるのが男だろ。

クニ そうだな、男だな。

クニ、やおらチカやアキやルミの袋の中身を自分の袋に移し替える。

アキ ちよつと、何するん。

クニに倣って、トシ、テルも同じく。

ルミ せんせい、うちの男子はやさしいな。

男 そうだなあ。えらいなあ。

クニ えへへ。

テル えへへ。

トシ えへへ。

アキ ありがとう。

チカ ありがとう。

ルミ ありがとう、ありがとう、ありがとう。

男 えらいなあ、みんな、えらいなあ。

思わず和み、子供たちの頭をなで回す男。

女軍人 こらー、さっさと歩かんかー！

女軍人、ピリピリと笛を吹く。

男 行こう。

子らはーい。

男を囲み、歩き始める子供たち。

男 自分の妄想から逃げられるわけなんてないんだから、従うしかない。

と、そこへ唐突に響く鐘の音。それは激しく。

男 まただ…またあの鐘…。

軍人 空襲警報だ！

男 空襲？

近づいてくる飛行機の爆音。

女軍人 B29です！ B29が低空飛行でこっちに近づいてきています。

軍人 防空壕だ、防空壕へ走れ！

男 防空壕？

チカ先生、こっち！

近づく飛行機の爆音。

逃げ惑う子供や大人。

飛行機は爆弾ではなく、たくさんビラを投下して去っていった。

テルなん、あれ。

アキ見て、飛行機がなんかバラまいとる。

トシなんや、なんや！

女軍人。ピリ。ピリと笛を吹く。

軍人 ばかもの！ 拾ってはいかん！ 拾えば非国民として連行するぞ！ わかったな！

子供たち、手にしていたビラを慌てて捨てる。

女軍人 慌ててビラを回収する。

ストップ。モーション。

男 真つ青な空に、爆撃機の腹がきらりと光った。そしてそれは、まるで青い青い海の中で、銀色の鱗を持つ小さな魚が、その命をつなぐために、たくさんの卵を水中に放つ時のように、その腹から無数の白い紙切れをバラまいて行ったのだ。それは満開のまま散りゆく桜のように、あるいは強い風にあおられる白い白い月見草のように、僕には見えた。僕は、思わずその花に手を伸ばした。

男、ピラ一枚を拾う。
ピラを読む。

男 日本国民に告ぐ。近いうちに激しい戦ひがこの島で行われます。すでに沖縄は……。

男がピラを手をしているのに気づく軍人。

チカ 先生！

軍人 貴様、何をしとるか……！

軍人、スコップを男に振りかざす。

子どもたち 先生……！

男、殴られると同時に暗転。

雨の音。

女の声がする。

女の声 ねえ、ちょっと。もしもし。

照明入ると、もとの教室。

男 あれ？ イテッ……。

女 大丈夫ですか？ 頭打ちました？

男 わああああああ。

もうひとりの男と女の顔を見て思わず身構える男。

女 ちよ、何やってんすか？ やっぱり頭、打ちました？

男 え？ え？

もうひとりの男 確かにすごい雷だったけど。驚きすぎだろう、キミ。

男 雷？

女 近かったし。

もうひとりの男 うん、近くに落ちたな、ありや。

女 雨もますますひどくなってる気がする…。

もうひとりの男 ひよとして台風って来てた？

女 聞いてないですよ。

男 全部、夢…？

しかし、男の手にはさきほど拾ったビラがしっかりと…。

男 いや、夢じゃない。このビラ…あ、あれ？ これ…。

それは、女の作ったチラシに変わっていた。

もうひとりの男 なんだよ、やけに気に入ってるなあ、そのチラシ。

女 白状します。

もうひとりの男 はい？

女 …実はそれ、私が作ったんです。

もうひとりの男 え。

女 私が作ったんです。

もうひとりの男 あっ、ああ、そうなの…よく見るとなかなかよくできてるなー、これ。

女 お気遣いは結構です。なんか、何をやってもうまくいかないんですよね、ハハ。学生時代から。なんか、なんのために生きてるんだろうって、思いたくないじゃないですか。でも、だからって生きがみたいなものも見つかからないし。だったら、もうこうなったら仕事に生きようって決めて。島への配属も自分で志願したんです。すごく張り切ってたんですけどね。なんかぜんぜんうまくいかなくて…。

もうひとりの男 そうなんだ。

女 羨ましいです。

もうひとりの男 え、俺？

女 自分の道、しっかりしてて。やっぱりダメなのかなー、私。

もうひとりの男 ー。俺も白状しちゃうのかなあ。

女 は？

もうひとりの男 さつきさ、歩いてるとき。言ったじゃん。居場所がないって。

女 ああ、はい。

もうひとりの男 俺も居場所なくて、逃げ出した。

女 そうなんですか？

もうひとりの男 俺、子供のころに親を亡くしてね。親戚が寺やってっから、そこに預けられたの。その寺、保育園もやってたし、ちょうどいいじ

ゃんで。でさ、そんち女の子しかいなかったんだけど、それがまた奔放な子でね。大学在学中にできちゃった婚。で、もうこうなりや、俺に

嫁あてがって寺継がせようって…。

女 お坊さんになりたくなくて？

もうひとりの男 いや、なんだろう？ 家庭持つって考えたらね、なんか想像できなくてさ。親知らないから。なれんのか、俺って。お見合いですっば

かして、船にのっちゃった。

女 じゃあ、仏像彫るってのは…。

もうひとりの男 それはほんとう。

女 そっか。

男 逃げるのは悪いことなのかな…。

女 え。

男 だって逃げないといけないときもある…。

女 どんな時？

男：…空襲とか。

もうひとりの男 おいおいなんの話をしてるんだ。

女 きよくたん。

もうひとりの男 俺さ、こんなこと人に話したの初めて。不思議だな。

女 ほっとする島ですから、ここは。そういう不思議な力があるんですよ、きっと。

もうひとりの男 キミはこの島がほんとに好きなんだなあ。

女 この島の出でもないんですけどね。不思議ですよね。…やっぱり、仕事やめたくないな。今はまだ。

もうひとりの男 キミは？ キミは何してんの？

男 僕は…：臨時で…：公務員を…。

女 あら！ご同業？

男 え…：そうなるかのなあ…。

もうひとりの男 で、キミも仕事に行き詰ってると。

男 なんて。

もうひとりの男 そういう顔だよ、キミ。

女 言ってる。

男、思わず自分の顔をなでまわす。

もうひとりの男 なんかシユールだな。縁もゆかりもない三人が夏休みの小学校の教室で、雨に閉じ込められて自らの人生を振り返る。

女 ね、やっぱりそういう島なんですよ、ここは。

男 そういう島…。

女、チラシを見る。

女 誰もがぐつときて、もう、この島に来ずにはいられなくなるような、そんなチラシを作れないかな。なんか、悔しいもん、このままだったら。ね、なんかいいアイデアないですか？

もうひとりの男 僕はね、仏像の台座を作っている。

女 ええ。でも台座だって、アートじゃないですか。

もうひとりの男 もちろんさ。僕は自分の芸術的センスについては、ミリの疑問も抱いてはいない。

女 だから、その芸術的センスで……。

もうひとりの男 僕の台座は弥勒さまあつてのものなんだ。

女 そりゃ、そうでしょう。え？ 何の話？

男 チラシの中身の話、たぶん。

女 中身？

もうひとりの男 そう！ いかによばらしい台座を作ったところで、上に載る仏様がみすばらしければ、かえって逆効果というものだ。考えてごらん。

女 あ！ チラシが台座で、この島が弥勒様……ってこと？

もうひとりの男 そう。キミは頭がいい。

女 いやあ、それほどでも……。

もうひとりの男 では聞こう。この島の魅力は？

女 のんびりしてるところ。

もうひとりの男 ほかは？

女 マグロがおいしい！

もうひとりの男 それから？

女 えと……海が、きれい？

もうひとりの男 それから？

女 えっと……町並みが独特。

もうひとりの男 ほかは？

女 うー……ん。なんかない？

男 えっ？ 俺に聞く？

女 旅行者の目で見て。

男 ええと……猫が多い。

女 それって、魅力ですか？

男 猫が好きな人にとっては。

女 そうか。

もうひとりの男 まずはね、島のことをとことん知らなきゃね。そりやもう、すみからすみまで。そうして初めて、いい作品が生まれるんだ。女 なるほど。

男 遠い山。

もうひとりの男 え？

男 遠い山のこと、知りたい。

もうひとりの男 遠い山？？

女 ああ、あの山です。遠井山。

3人、窓に近づく。

男 遠井山には、何か施設のようなものはない？

女 施設？ ないんじゃないですか。なんか、アンテナみたいなのは立ってますけど。

窓の外を見る3人。

男 アンテナ：…もしかして潜水艦を見張る？

女 は？ 潜水艦？ 何言ってるんですか。テレビかなんかのでしょ。

男 ああ：…そか。

女 潜水艦で…。

教室に入ってくる老婆。

老婆 遠井山には軍の監視所があったんじゃ。

女 おばあさん！

男 え。

もうひとりの男 びっくりだな。どこにいたんですか？

老婆 監視所じゃ。

もうひとりの男 ええ？

男 その、監視所を作るときに、子供たちで、砂、運んだりしました？

老婆 そうそう。むしろ、島のもんが大人も子供も総動員で山の上まで砂を運んでなあ。

男 まさか…。

老婆 島の人みんなで楽しみにしとった運動会もなんもかんも中止になって。学校も半日それでつぶれてな。あのころは、勉強しとんでも、できんかった。

女 へえ、そんなことが…。でも、あなた、なんで知ってるんですか？ 監視所のこと。

男 いや…：なんか…：そうなのかなあつて…。

女 千里眼的な？

男 えっ。

女子供たちが砂を運ぶ風景が、脳裏に浮かんだんですね。

男 脳裏についていうか…：この目で見ちゃったっていうか…。

女 …：すごい。

男 あ、いや…。

もうひとりの男 ああ、ほらあった。学級文庫。「穂戸之島の歴史」。これを読んだんだろう。俺たちが必死にお婆さん探してるときに。

それは先ほどの本。

学級文庫として同じ本が何冊も棚に置かれている。

男 その本…。

もうひとりの男 読んだんだろ？

女 なあんだ。イカサマー？

男 読んでないよ、まだ。

女 またまたー。

もうひとりの男 キミも読んだ方がいい。(本を一冊、渡す。)

女 ですね。

男 しかし、いったい何を監視するんです？ あんな山のとっぺんから。

老婆 ここの海はなあ、沖縄から本土へ、敵が攻め入るときには必ず通る海じゃけえ。

女 敵って…潜水艦！？…やっぱり！（読んでるんじゃないですか）

老婆 あと3週間…。

男 はい？

老婆 あと3週間早く戦争が終わってれば、あんな地獄は見ずにすんだんじゃ。

男 地獄？…じゃ、あのあと…。

老婆 あの日…この島は地獄になった。

女 この島が…。

もうひとりの男 地獄？

3人、それぞれ本の表紙を開く。

嵐がごうごうと音をたてる。

稲光で、部屋がちかちかする。

老婆 あの日…朝早くにグラマンが来たつうて、空襲警報が鳴った…。けどすぐに解除になったんじゃ。それで学校行こう言うて…みんな行ってしまった。うちは妹を…赤ん坊をおんぶしとったけえ、行けんかったんじゃ。

蝉の声。

先ほどと同じ、短い半鐘が断続的になる。

少女(老婆) あ、ほら、解除じゃ。空襲警報が解除になった。

母(女) 今日はもうこのまま休みんさい。おかあも畑が忙しいけん、ミサコの面倒みちよってよ。少女 いやじゃ、学校行く。行きたい。

母 おとうも兵隊でおらんのじゃけ、おかあが働かんといけんの。

少女 でもみんな学校へ行くよ。

婆(もうひとりの男) ああ、痛い。腰が痛い。

母 ほら、おばあも具合悪いって言いよるけん、帰るよ。

老婆・女・もうひとりの男、捌ける。

代わりに子供たちが、ひとりまたひとりと姿を現す。

この日の日直なのだろう子供が黒板に大きく7月25日と日付を入れる。

ルミ 1945年7月25日。

チカ この島に、2機のグラマンが静かにその陰を落としました。

アキ それはよく晴れた夏の日でした。

ユキ 空はどこまでも青く。

チカ 空を映した海は、さらに青く。

トシ その朝発動された空襲警報が。

テル 解除になったばかりだったので。

クニ みんなすっかり気を許していたのです。

子ら その日。

チカ 朝9時過ぎに警報が解除になって。

ルミ 私たちは三々五々、学校へ向かいました。

テル 中にはそのまま休んでしまう生徒もいました。

アキ けれども私たちは学校が大好きだったので。

ユキ 警報が解除になると、すぐに家を飛び出しました。

トシ 授業があるのかどうかまだわからなかったのです。

ルミ 私たちは運動場で遊びました。

子供たちの遊ぶ姿。

クニ そのほとんどが山からなるこの島には。

テル 平地があまりありません。

ユキ だから、私たちの運動場はとても狭いのです。

トシ そのかわり、校舎は、2階建てです。

ルミ 自慢の校舎です。

アキ 私たちが校庭で遊んでいると。

チカ 始業の合図の半鐘がなりました。

半鐘が鳴る。

かーん、かかん。かかん。かーん。かん。

テル それは朝礼なし。

クニ 授業開始を意味していました。

ルミ 私たちは教室へ走りました。

チカ 西校舎2階の私たちの教室へ。

子ら あの10時14分に向かって。

子供たち、男のもとへ駆け込んでくる。

男はすっかり子供たちの先生になっている。

アキ 授業が始まるぞ。ほら！

ルミ 待って、靴が脱げた！

テル やーい、のろま。

アキ なんなん、ばーか。

チカ 先生、おはようございます！

男 おはよう。今日は、2限目からだぞ。なんだったかな？

ルミ えっと。えっと。

ユキ 国語。

ルミ こくご！

男 じゃあ、席について。教科書を広げて。

子らはーい！

男 ではみんなで順番に読んでもらおう。

子らはーい。

チカ サイト サイト サクラガ サイト。

テル ヒノマルノハタ バンザイ バンザイ。

トシ ススメ ススメ ヘイタイ ススメ。

アキ オヒサマ アカイ アサヒガ アカイ。

クニ ハシレ ハシレ シロカテ アカカテ。

ユキ カラスガ キマス スズメガ キマス。

ルミ ソラガ ハレタ キレイニ ハレタ。先生、これっち、今日のことやな。

男 そうだな、今日もほんとに空がきれいだ。

みんな、窓の外を見やる。

飛行機の音が近づいてくる。

男 あれは…なんの音だ？

テル 友軍機だ！

男 友軍機？

子供たち、窓辺に駆け寄る。

テル あ、ほら、パイロットが見える。おおいー!!

手を振るテル。つられて手を振る他の子たち。

トシ ちがうっ！ あれは友軍機やない！

クニ 敵機じゃ！ 敵機が攻めて来たあ。

チカ なんてっ。空襲警報解除になったばかりやん！

ばりばりと音をたてて敵機が近づいてくる。

ルミ 怖いよ、先生！

アキ 助けて先生！

男 みんな、机の下にもぐって、早く！

子ら 先生ッ！

大きな衝撃音。

崩れ行く世界。

キエテイクコドモたち。

暗転。すべてが闇に飲み込まれて。

照明変化するともとの教室。

茫然とする男。

もうひとりの男と女、それぞれの本をぱたんと閉じる。

もうひとりの男　なんか、すごい話だなあ。
女ですネ……。

雨の音、ザアザアと。

女　雨、やみませんね。

もうひとりの男　どうした、顔が真っ青だぞ。

男　……もうやめてくれ。

女　それは無理ですよ。

男　え……。

女　だって、まだまだ空真っ黒ですよ。ますます激しくなりそう。

もうひとりの男　こりゃあ、なかなかここを出られそうにないぞ。

女　雨のせいかな。なんか、胸のあたりがシクシクするんです。

もう一人の男　それは恋じゃないのかい？

女　は？

もうひとりの男　……ひどい降りだなあー。

女　ですネー！

もうひとりの男　まるで空が泣いてるようだ。

女　号泣ですネ。

もうひとりの男　腹減ったなあ。俺も号泣したい。

女　マグロ、食べに来たんでしたね、そう言えば。

もうひとりの男　そう、マグロ。

女　おいしいですよ、このマグロは。

もうひとりの男　チラシに特筆すべきだな。

女　ですネ。そう言えば……おばあさん、私たちをどこへ案内してくれるつもりだったんですかねえ。

振り返ると、老婆はぶつぶつと何事が唱えている。

老婆 日本ハ 春夏秋冬ノ ナガメノ ウツクシイ 国デス 山ヤ 川ヤ 海ノ キレイナ 国デス コノヨイ 国ニ 私タチハ 生マレマシタ オトウサン
モ オカアサンモ コノ 国ニ オ生マレニナリマシタ オヂイサンモ オバアサンモ コノ 国ニ オ生マレニナリマシタ 日本 ヨイ 国 キヨイ 国 世界
ニヒトツノ 神ノ 国 日本 ヨイ 国 強イクニ 世界ニ カガヤク エライ 国……。
女 なんだろ、あれ。

もうひとりの男 さあ。さっきの話で思い出しちゃったのかな、戦争中のこと。

女、本のページを改めてパラパラとめくる。

女 あっ。えっ？

もうひとりの男 どうかした？

女 これ、これ見てください。この写真。

もうひとりの男 ん？ 集合写真だね。へえ。昭和20年……。

女 この、真ん中の人……。

もうひとりの男 え……あ！

女 ね。似てませんか？

もうひとりの男 これって……。

もうひとりの男と女、男を見る。

老婆 サイト サイト サクラガ サイト……。

男 やめてくれー！ 僕に、一体何を見せようとしてるんだ！ どうして僕なんだ！

老婆を睨みつける男。

もうひとりの男 おい、キミ、この写真見てみるよ。

男 あなたもそうだ。

もうひとりの男 は？

男 いただろう！ 僕の妄想の中に！

もうひとりの男 はあ？ 何言ってるんだ。

女 いいからちよつと見てくださいって。この真ん中の、先生…。

男 あなたもだ。

女 え。

男 これがミステリーツアーか。みんなグルなのか！ 子供たちはどこだ！？ どこへ行った！

女 子供たちって…？

男 (もうひとりの男に) どうしてこの島へ来た？ (女に) どうして僕の前にチラシを落とした？ (老婆に) どうして僕に悪夢を見せるんだ？

女 悪夢って…何が見えてるの、あなたに。

男 子供は…ルミは？ テルは？ アキは？ トシはどこへ行った？ クニは？ チカは？ ユキは！ みんなどこへ消えたんだ！？

女 …何を…言ってるの？ なんか怖い。

もうひとりの男 頭、やられたか？ さっきの雷で。

男 教えてくれ！ あの子たちは、どうなったんだ！

問。

老婆 消えた…みんな消えた…。

男 消えた…？

もうひとりの男 消えたって…？

老婆 あの日…グラマンが落としていった爆弾で…ぽっかり消えてしもうた…36人の…子供たちが…。

男 36人…。

もうひとりの男 ミロクか…。

老婆 ちようど授業が始まったばかりじゃった…。

男 え…。

女 (本を見ながら) 監視所を狙った爆弾が国民小学校を直撃したって。

男 なんて…だって、あんなに離れてるじゃないですか。監視所と、ここ。それに…あのとき、パイロットの顔だっけはっきり見えた。向こうにだって僕たちが、子供たちが見えていたはずだ！ なんて間違えるんだ！

男、女の手から本を奪うと、必死に文字を追う。

子供たちがうっすらとその姿を現し始める。

テル グラマンは3発の爆弾を落としていった。

アキ 一発目は海に落ちて。

ユキ 大きな噴水のような水しぶきをあげた。

トシ 2発目はさっきまで遊んでいた校庭に落ちた。

チカ 舞い上がった砂ぼこりであたりが暗くなった。

クニ そして3発目。ぼくたちの校舎に落ちた。

ルミ 西校舎にあった大きな掛け時計は。

子ら 10時14分で時を止めた。

男、本を取り落す。

蝉の声に戦闘機の音が重なる。

老婆 爆弾で校舎はべしゃんこになってしまった。西校舎にいた子供たちは校舎ごとつぶされ、バラバラになって。バラバラになった体が、遠くは海までも飛ばされてなあ。穂戸の海は子供たちの血で真っ赤に色を変えたんじや。あの日127人の命が奪われた。亡くなったものの多くは、もう、誰が誰だかわからんようになってしまった。それでもみな必死に、わが子の身体を、体のほんの一部でもと、探し求めている。よく晴れた暑い日じゃったんじや。おせ返るような血の匂い。夏のことじゃやて、すぐハエも飛んでくるし、一刻も早く見つけてやらんと、ウジがわいて、腐ってしまう。皆が必死でがれきをどかしてるそばでな、野良犬が肉片を啜って行ったりしてなあ。わしはその野良犬が憎く

で、憎くて、手当り次第に石を投げつけた。

言葉を失う3人。

雨の音だけが老婆に答えているようだ。

老婆 すっかり日が落ちて夜になっても、子供を探す親たちの声が響いてな。月明かりに照られさせて、そこらじゅうに散らばった子供たちの教科書やら帳面やらが、風を受けてハタハタしとった。まるで手向けの白い花のようじゃった。

雨の音。

老婆 毎日毎日、島じゅう総動員で見つからん子らを探したんじゃが、とうとう36人の子供らは、そのかけらも見つけだすこともできずに終わってしまった。

人々、ひとりひとり出てくる。

それは冒頭シーンの再現。

白い花と見えたそれは、爆弾によってバラバラになってしまった子供たちの身体。

人(女) おおい、おばあが迎えに来たぞ、はよう出ておいで。

人(もうひとりの男) おーい、おーい。早う出てこんかー。

必死に我が子の姿を探す悲しい親たち。

人(女) ああ、この足のホクロ……うちん子じゃ……かわいそうに。痛かったのう。さ、うちへ帰ろう。
人(もうひとりの男) ああ……シャツに名前が書いてある……こりやうちん子じゃ……。

人々はやっと探し出した白い花を、大事そうにつれて帰る。

子ら 身体の一部でも見つかったものはまだ帰る家がある。

子ら けれど、どんなに探しても指一本見つからない36人の子供。

男 消えた子供たちは帰る家もなく。どこへ行ってしまったのか。

ユキ 帰りたい。おうちに帰りたい。

チカ どうして私をみつけてくれないの？

クニ おとう、おかあ、迎えにきてくれよう。

アキ 怖いよう、怖いよう。迎えにきてよう。

トシ みんなどこへ行ってしまったんじゃ？

テル 置いていかんでくれよう。

ルミ こわいよう。帰りたいよう。

男 ずっとここで怯えていたのだろうか。

男、振り向く。

ルミ 先生、あそぼ。

チカ 私たち、先生がいらっしやるのをずっと待っていました。

アキ いつまで待っても授業が始まらなくて。

クニ すごく困ってました。

ユキ 私たちずっと待ってたんです。

チカ 朝礼がなくなつて。

ルミ 教室に戻つて。

ユキ ずっと待ってたのに。

テル 先生来ないから。

アキ 男子は女子をいじめるし。

トシ 一年生は泣き出すし。

チカ ほんとに大変で。

男、再び振り返って。

男 1945年7月25日。空はどこまでも青く、空を映した海はなおいつそう青く、白い腹を見せて魚が跳ねていた。

女、もうひとりの男は、本を手に。

もうひとりの男 2機のグラマンは、遠井山にある陸軍監視所ではなく、海辺に立つこの小学校に2発の爆弾を落とし、女逃げ惑う子供たちに機銃掃射の雨を降らせたのでした。

照明が子供たちの姿を浮かびあがらせる。

チカ 夜になって

トシ 我が子を探す親たちの姿を

アキ 月明かりが照らしていました

テル 子供たちの教科書やノートが

クニ 運動場いっぱいに散乱し

ルミ 風を受けてハタハタと

ユキ そのページを繰っています

テル それはまるで

トシ 月明かりに照らされた白い花が

チカ その花びらを震わせているようでした

子らでも誰もわたしたちを見つけることができませんでした

ただ立ち尽くすしかない男。

男 この子たちについて何の罪があったのか？ どうして命を、その体ごと全部、髪一本残さず奪われねばならなかったのか。あの日、たしか
ここで輝いていたあの命を。

清らかな光が子供たちを包み込んでいく。

ルミ 先生、忘れないで

男 答えなんてあるはずがない

チカ 私たちを覚えていて

男 けなげに生きた子供たちを

トシ またかけっこしようやー、先生

男 その命の輝きを

クニ 先生、今度、俺らの巣連れてっちやる

男 奪う権利が誰にあるのか

テル 先生はやさしいなあ

男 まっすぐに僕を見たあの瞳

アキ 先生、もっと遊びたかった

男 一生僕は憶えているだろう

ユキ もっと勉強したかった

男 あの子たちを忘れる日はないと

子ら 約束だよ、先生

男 僕は誓うよ

子供たちせんせー、せんせーと囁く。

いつの間にかそれはセミの声への変貌してゆく。

光の中、笑いながら消えていく子供たち。

女、本を抱きしめている。

女 空っぽの墓って、そういうことだったんですね。私、なんにも知らなかった。何がほっとする島よ……。

もうひとりの男 知らないということは……罪だな。

男 僕たちは知らずに罪を犯してる……。

女 なんか、自分が恥ずかしくなっちゃった……。私、ちゃんとこの島のこと勉強しなめます。たっくさんの人が犠牲になったこと。どこにも帰れなかった36人の子供たちが、だけど確かにここにいたってこと、ちゃんと人に伝えられるように。

男 あの子たちは、消えたわけじゃない。あんなも確かに生きてたんだ。今もきつとここにいる。

もうひとりの男 36人……。ミロクの子供たち……。だな。

男 ミロクって……。未来を救うって、言ってみましたよね。

もうひとりの男 ああ。

男 未来を救う……。

もうひとりの男 36の台座はこの子たちに出会うために彫っていたのかもしれない、なんてね。

男 え……？

女 そうですよ！ きつと。子供たちはミロク様になったんです。

男 あの子たちが、未来を救う……。

女 あなた、呼ばれたんですよ、この子たちに。

男 呼ばれた？ 僕が？

女 だってほら、あなたこの先生にそっくり。

男 え？

女 ほら、この集合写真の真ん中の先生。

三人、本を覗き込む。

もうひとりの男 生き写しだな。

男 みんないい顔してるなあー。

女 この中におばあさんもいるのかなあ。

雨音がいつの間にか消えている。

もうひとりの男 おっ、雨が、やんだな。

女 ほんとだあ。

もうひとりの男 食べに行きますか、マグロ。

女 はい。あれ、おばあさん……？

老婆はどこへ消えてしまったのだろうか。

もうひとりの男 探しに行く？

女 や、マグロで。

もうひとりの男 オーケー。キミもマグロで？

男 いや、僕はもう少しここにいます。

もうひとりの男 そう？ じゃ。

女 お先にー。あ、あとで観光課に寄ってください。

女、もうひとりの男、本を男に渡す。

男 気が向いたら。

女 必ずですよー。サボってたわけじゃないって、証言してもらわないと。

もうひとりの男 俺がしょっか？

女 いやー、ちょっと……。

もうひとりの男 ちよっと何？

女 うさくさそうっていうか……。

もうひとりの男なにそれ。

女待ってますから。(男に言うとお出ていく)

もうひとりの男 うさんくさいって、ねえ、ちよっと！

もうひとりの男、女を追って捌ける。

静寂。

男、机の間を歩く。

まるでそこに子供たちが座っているかのように。

男 千カ、アキ、クニ、トシ、ユキ、テル、ルミ。みんな、まだそこにいるのかい？

男の呼びかけに答えるかのごとく静かに蝉が鳴き始める。

男 ありがとうな、みんな。一人前の先生になって、きつとまた会いに来るよ。

蝉の声が答える。

男 約束だ。

ゆっくりと茜色の夕日に輝いてゆく教室。

男 まぶしいなあ。

男、光を大きく吸い込む。

男 気をつけ！ 礼！ ……さようなら。 ……さようなら ……。

男、本をそっと置くと、一度振り返ってから、教室を出てゆく。
遠くに子供の声が聞こえる。

子ら けっこーけっこー、かけっこう。けっこー、けっこー、かけっこう。

全てが茜色に溶けてゆく。

終幕